

次「資本論を読む会」(第17回)

日時：2020年2月18日(火)午後6時～
会場：支局・社青同事務所

1月14日に開いた「読む会」には8人が参加。「第4章第2節 一般定式の矛盾」をやりました(岩波文庫p271-290)。いつも通り、みんなで読み合わせてからTakさんからレポート。すでに「賃金、価格および利潤」で学習して「労働力商品が剰余価値を生む」ことを知っていますから、「なぜ利潤が生まれるのか」を解き明かすマルクスの書き方は、七面倒くさく感じる人や、どういう説き方をするのかと「ゾクゾクとする」人まで、様々です。マルクス独特の表現を楽しんで下さい。

終了後、新年会を兼ねた飲み会でも議論は続きました。次回はいよいよ第一分冊の最後「第3節 労働力の買いと売り」です。初めての方大歓迎。また、これまでの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」
オープン・コーナーにあります。

レポーターから

第四章「貨幣の資本への転化」 第2節「一般定式の矛盾」

○「一般定式・G-W-G'」では、売りと買いの順序の逆転、という「形式的差異」により、単純商品流通の全法則に矛盾することになるが、それはいかに行われるか？また、順序の顛倒があるとはいえ、売りと買いの「等価交換」の商品流通は、本当に「価値増殖を許すのか？」も考察する。

○Aの生産物・葡萄酒がBの生産物・穀物と交換される。「使用価値」でみれば、①お互いに、「自分には無用の使用価値で必要な使用価値を得た」という効用、また、②得た使用価値の量は、「自分でその商品を同一労働時間で生産する」より多くの量を受け取れるという効用もある。結果、交換により、使用価値の点では、「交換は双方が利得する」。

○しかし、価値・すなわち「対象化された社会的労働」は、同一所有者の下で商品→貨幣→商品の態容に変化するだけであり、交換価値は両者が利得することはできない。商品交換は、純粋な態容では等価交換であって、価値を増やすための手段ではない。

○「商品流通を剰余価値の源泉」として説明しようとする試みには、①使用価値と交換価値の混同という誤りと、②全生産物を商品として生産する発達した資本主義的商品生産社会を、「みずから生産し自分の欲望以上の剰余・不用部分だけを流通に投ずる」旧社会(旧共同体・封建制等)にすり替える誤りがあり、現代の近代経済学者によって繰り返されている。

○仮に商品を「価値以上で売れる」、または「価値以下で買える」との仮定、また「消費者は生産者により多く支払う・商品所有者は高く売る特権がある」という仮定しても、「売りで儲けて買いで損する」、「売りで損して買いで儲ける」、「生産者として儲けて消費者として損する」等、相殺されるだけであり、総価値は変わらず、剰余価値形成は説明できない。

○『『詐取』では価値増殖しない』という同じ理由で、近代的な資本主義的資本の分析には、「詐取」に基づく、前時代の商業資本や高利貸資本を考察対象としない。

○そうは言っても、実際には、資本主義経済下での「本来の商業資本」は、「より高く売るために買う」ことを、最も純粋に行う。さらにG-G'形態・媒介のない利殖である、資本主義経済下での「高利貸資本」ではさらに矛盾は明瞭で、「貨幣がより多い貨幣と交換される」という、貨幣の性質に矛盾し商品交換の立場では説明できない。

○それらの価値増殖を正しく理解するためには、今の商品流通の前提の先にある、「永い系列の中間項」が必要である。(今はまだ、早すぎる：この前提から理解しようすると、誤る。)

○剰余価値は流通から発生しえない。「流通の背後」で行われるのだから、「流通の外」に出て、商品所有者とその商品との関連を見てみる。商品生産者は「自己の労働で商品価値を高める」ことはできるが、それは決して「自己増殖する価値」＝「素材価値が自己増殖して剰余価値を生む」わけではない(「彼の追加労働」が等価として表示されるだけ)。したがって、流通の外部で自分と商品との関係の中で、価値増殖・資本への転化をすることも不可能である。

○こうして二重の結果が生じる。①?「貨幣の資本への転化」は、商品交換法則の下での「等価交換が出发点」である。資本家は、商品とその価値で買い、その価値で売る。?だが流通過程の終わりには、投入したより多くの価値を引き出す。②彼の、資本家への発展は、?流通部面で行われなければならない、?また流通部面で行われるべきものでもない。これが問題の条件である。(from Tak)

